

定家「霜まよふ」について

—— 縮約化による表現効果とその景 ——

佐藤 茂樹

定家の「しもまよふ空にしをれしかりがねのかへるつばさに春雨ぞふる」(『新古今』春上・六三)の「霜まよふ」については、久保田淳氏の『霜置まよふ』の縮約表現であつて、『霜降りまよふ』の略ではない⁽¹⁾という御論により、研究は進展した。しかし、その景の捉え方は定まつてはいない。解釈上は次のように分かれる。

- (1) 霜のはげしく乱れ降る⁽²⁾。
- (2) 霜の降り乱れる(乱れて降る)⁽³⁾。
- (3) 霜がひどく置いて⁽⁴⁾。
- (4) 霜が紛乱と置く状態⁽⁵⁾。
- (5) うつすらと霜の置いている所もあれば、所々は消えてしまった所もあるという状態⁽⁶⁾。

孝村文人氏が「『霜まよふ空』を、一般に、雁が渡つて来た秋の空のことと解しているが、従えない。霜は冬のものとしてされていた」(前掲書)と解され、久保田淳氏も「雁

が迷うような霜の状態だと見たい。……『しをれし』は雁が秋飛来した時の状態ではなく、冬を過していた時の状態をいつているのではないか」(前掲書)と考察されているように、「霜まよふ」を冬の景と解する考えがある。その一方で、湯之上早苗氏は、「『霜まよふ』は注釈書に『霜の乱れ降る』とするのが普通であるが、この『乱れ降る』のところを『激しく乱れ降る』とするのは誤りである。秋霜はきびしいが、何といつても秋のもので、この『乱れる』というのはいまだ『霜氣』に覆い尽くされない状態である」(前掲論文)と解かれ、片山享氏も「秋霜であれば雁が迷うほど深く置いた霜ではない。むしろ、さらさらと紛乱する霜の状態そのものを『霜まよふ』と表現したとみるべきである」(前掲論文)と考えられているように、「霜まよふ」を秋の景とする考えがある。

「霜まよふ」の先行例として、次の三例が考えられている。

- (1) 心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花（『古今』 秋下・二七七 凡河内みつね）
- (2) 住よしのちぎのかたそぎゆきもあはで霜置きまよふ冬はきにけり（『堀河百首』 冬・霜・九二〇 俊頼、『散木奇歌集』 「霜おきまがふ」）
- (3) 冬になりゆくままには、蘆の枯葉に霜置き迷ひ、水際の氷に閉ぢられ、まして雪降りぬれば

（『古来風体抄』）

(3)の俊成の例は、初冬の典型美として、枯葉の霜を「置く」「結ぶ」ではなく、「置き迷ふ」ものとして捉えている。俊成のこの表現に直接的に影響を与えたのは、(2)の俊頼歌であったろうと思われる。特に下旬の「霜置きまよふ冬はきにけり」から、冬の到来を「霜置きまよふ」ことにより知ることを学んだのだと思われる。俊頼歌にあつては、左右にある千木のいづれに置くかを霜は迷う又は、片そがれているため霜は千木に置くことを迷うとして知的・観念的に発想されたものであるが、下旬に「霜置きまよふ冬はきにけり」と形象されることにより、観念的次元から写実的

次元への転化を見せ、「霜置きまよふ」景は、冬の到来を示す叙景表現としての意味を獲得したものと思われる。このように、二重の意味をもつ表現であった「霜置きまよふ」を、俊成は踏襲したものと思われる。観念的発想として、枯葉に置く霜は、枯葉色を霜と見紛い置くことを迷う。そして、叙景的表現として、冬の景を「冬になりゆくままには、蘆の枯葉に霜置き迷ひ」として捉えたものと思われる。枯葉における霜は「霜むすぶ」「霜おく」ではなく、「霜置き迷ふ」ものとして捉えられたと言つていいのかもしれない。これら俊頼歌、俊成の表現に影響を与えたものとして、

- (1)のみつね歌が考えられている。この「おきまどはせる」は古今歌らしい、知的興趣に満ちた発想であると評価されている。白菊の咲いている庭に、今朝は初霜がおり、庭の様子が昨日までとは一変した感を、白菊と霜とが区別出来ない⁽⁷⁾と知的に処理し、初霜がおりて霜が白菊かわからなくさせているとして、「はつしものおきまどはせる白菊の花」と表現したのである。「おきまどはせる」は、庭の様子を一変させた初霜だから着想されたのであり、初霜においてこそ効果的な表現だと考えられる。

俊頼、俊成の用例は、「冬はきにけり」「冬になりゆくままに」の表現から初冬であることが解される。『金葉集』

においては、霜は秋部にはなく、冬の素材として扱われている。しかし、『散木奇歌集』には、秋部に霜を歌っており、はつ霜のおき残したるしら菊を露やぬすみにうつろはずらん

(五四九「残菊帯霜」)

もみぢ葉をみくらの山にはつ霜はあさとあけてやおきそめつらん (五五四「十首歌中にもみぢを」)

のように、秋部に「初霜」を詠出している。俊頼には、霜は秋のものでもあり、冬のものでもあったと思われる。

俊成は『長秋詠草』において、

もとゆひの霜おきそへて行く秋はつらきものからをしくもあるかな (五〇「秋歌二十首」)

と秋歌に霜を歌っているが、この一首だけであり、霜は冬部に配されており、『千載集』には秋部には霜の歌がないことを考えると、俊成は霜を冬のものとして解していたと思われる。俊頼は秋に初霜を詠じているのではあるが、必ずしも霜を秋のものと限定してはいないので、俊頼・俊成の(2)(3)の用例は初冬の景であることを考慮すると初霜を意味していたと思われるのである。これは、みつね歌が初霜を歌っていたことも影響していると思われる。俊頼・俊成の「霜置き迷ふ」は、みつね歌の「はつしものおきまどはせる」の影響下にある発想だけに「初霜」であること

は前提であったと思われるのである。定家の最初の用例も「秋の末葉にまよふ初霜」である。このように「霜まよふ」とは初霜に対する形容であったと思われる。

二

定家の「霜まよふ」の用例を成立年代順に記す。(作歌年次不明一首は最後に置く。)

「皇后宮大輔百首」 文治三年(一一八七) 春詠送之

(4) さびしきはおきそへてけり萩のえの秋の末葉にまよふ初しも (秋・二二三八)

「百廿八首和歌」 建久七年(一一九六) 九月十八日

(5) さびしとよおきまよふ霜の夕まぐれをかやのこ屋の野べの一村 (冬・一六五三)

「仁和寺宮五十首」 建久九年(一一九八) 夏

(6) 霜まよふ空にしをれしかりがねのかへる翅に春雨ぞふる

「秋日侍太上皇仙洞詠百首応製和歌(一一〇〇年)

(7) 白妙の衣しでうつひびきより置きまよふ霜の色にいづらん (秋・九五二)

「院五十首」 建久元年(一一二〇) 春

(8) ととせあまりみとせはふりぬ夜の霜おきまよふ袖

に春をへだてて (雑・一八二五)

〔夏日侍 千五百番歌合是也〕(一一二〇一年)

(9) ひとりぬる山どりののをのしだりをに霜おきまよふ

とこの月影(秋・一〇五一、『新古今』秋下・四八七)

〔建仁二年(一一二〇二) 三月六首〕

(10) 霜まよふを田のかりほのさむしろに月ともわかず

いねがての空 (秋・二三〇五)

〔自筆遺草〕(一一三三三年)⁽⁹⁾

(11) ふせぐべきかたこそなけれ白菊のうつろふうへに

まよふ初霜 (員外之外 秋・三二六八三)

(作歌年次不明)

(12) 黒かみのながきやみぢもあけぬらんおきまよふ霜

のきゆる朝日に (なき人の名をおのおのと

りて卒塔婆供養すとて、人のすすめし歌、磐姫皇后・

二九六二)

定家の最初の用例(4)歌の「秋の末葉」は

むしのねはあさぢがもとにうづもれて秋はすゑばの

色にぞ有りける

(『千載』秋下・三三八 寂蓮法師)

草も木もあきのすゑははみえゆくに月こそ色もかは

らざりけれ

(『千載』秋下・三三五 式子内親王)

に見えるように、秋の末の枯れ葉を示していると思われる。

この定家の(4)歌は、俊成の(3)の用法を継承したものと云える。枯れ葉に置く霜は、枯れ葉色のために置くことを迷うのであり、枯れ葉に置いた霜は霜と枯れ葉との色の類似性故に見まがうのである。秋も末の萩の枯れ葉は寂しいものであるが、更に寂しさが加わった色として、定家は霜を見ている。(2)の俊頼、(3)の俊成、(4)の定家の三つの用例は霜の置く場は示されているが、その時を特定することは出来ない。

(5)歌は(4)歌の成立から九年後の歌であるが、用法上の展開がある。「霜まよふ」景を「さびし」と捉えている点は継承されているが、ここでは霜のおりる時が示されている。夕暮れの霜を捉えた点に特徴を見ることが出来る。「置きまよふ」という表現が発想上、有していた「置くことを迷う」という意味が、認められないことも新しい展開として理解される。霜の状態、及びその状態から感得される詠作者の心情を反映した叙景表現に重きを置いた表現になったと思われる。但し、状態だけを表すとすれば、「迷ふ」ではなく、「置く」「結ぶ」や「ふかし」「乱る」の詞でも良かっただろうと思われる。そして、伝統的とも思われない

「迷ふ」を用いたことには理由があったと思われる。(5)歌以後の成立の歌、(7)(8)歌の二首も霜が置くことを迷う理由は認めたいようである。ここに、片山享氏の「もと／＼擬人化表現として出発した「まよふ」の意味は次第に擬人化表現の本意を失ってゆき」(前掲論文)と考察された例を見ることが出来る。又、特徴として見られるのは、「夕暮」「夜」「夜更け」という時が明示されていることである。

霜は、『古今集』では寒さを表す冬の素材ではあるが、季節の歌ではなく恋歌などで多く詠まれている。

ささのほにおくはつしもの夜をさむみしみはつくとも色にいでめや (『古今』恋三・六六三 みつね)

さかしらに夏は人まねささのほのさやぐしもよをわがひとりぬる (『古今』俳諧歌・一〇四七 よみ人しらず)

に見えるように、霜夜が歌われており、朝置く霜も歌われているが、霜は寒い夜に置くものと考えられていたようである。⁽¹¹⁾ (5)歌の「夕まぐれ」の霜は、

宮こにもいまや衣をうつの山夕しも払ふつたのしたみち (『新古今』羈旅・九八一 定家朝臣)

の「夕しも」のことであり、次にあげる古注の

擣衣は初秋、仲秋の事也。こ、は山路、夕霜深く、

冬などの景気なり。都は衣うつ時節ならんとも也 (『新古今和歌集抄出聞書』)
宇津の山ハ夕霜にて冬のてい也。都ハよさむの時分にて、ころもうたんと思ひやりたり

(『かな傍注本 新古今和歌集』)

を参考にすると、昆陽のさびしく、寒い所であるが故に、霜は普通と違つて早く夕暮に置くと思つたものと思われる。又、(7)歌も「白妙の衣しでうつびきより置きまよふ霜」と詠んでいるように、(5)(7)の例歌は置き初めの霜と考えられる。一面におりた白一色の霜景色ではなく、

あまくものよそにかりがねききしよりはだれしもふりさむしこのよは

(『万葉』卷十・秋雑歌・二二三六 作者未詳)

のように、まだらにおりた霜景色ではないかと思われる。所々に置く状態を、霜が置くことをためらつていてと感覚的に捉えた発想ではなかつたかと思われる。その点では、堅田早苗氏の「置き始めた頃の霜であり、その頃の霜は地面を一面真白に覆い尽くすような状態の霜ではない。どちらかと言えば、薄く置いてもすぐ消えてしまふような霜である。うつすらと霜の置いている所もあれば、所々は消えてしまった所もある、という状態」⁽¹²⁾という状態に近いの

であるが、「所々は消えてしまった」のではなく、霜の見えない所はこれから霜の置く所だと考えたいと思う。(5)(7)の定家の二首は霜の始まりの描写と考えてよいと思うが、その他の七首の用例には、そのことを示す表現はない。霜がひどく乱れ置いているのか、薄く置いているのか判断はつき難い。

(8)歌の「とせあまりみとせはふりぬ夜の霜おきまよふ袖に春をへだてて」は、久保田淳氏が、「十三年もの昔になつてしまつた。夜、涙の霜がひどく置く袖で、春から遠ざかつたままに」と解釈されているように、十三年もの不遇をかこつ涙の霜は、「霜がひどく置く」ことが、人生の春から遠いことを暗示し得て効果的であると思われる。但し、「夜の霜おきまよふ袖」以来「とせあまりみとせはふりぬ」と倒置させ、昇進から洩れ、初めて流した涙が霜となつて以来、十三年が経つたと解すれば、「霜おきまよふ」は「霜がひどく置く」とは考え難い。十三年もの長きにわたることを思うことなく流した初めての少しの涙が霜となつたことを言い表していると考ええることも可能なように思われる。霜の状態を定義づけることは困難なのである。(12)の歌の「おきまよふ霜」は「ながみやみぢ」に對して、「ひどく置く霜」という対比の上で解釈出来る歌である。

但し、理屈の上での問題であるが、ひどく置いた霜が朝日によつて消えることがあるのだろうかという疑問を感じる。むしろ、(12)歌は霜の状態を表す以上に、「まよふ」の心理的側面に重きの置かれた表現ではなかつたかと思われる。この例歌にあつて「おきまよふ霜」とは、作歌に関わる

ありつつもきみをばまたむうちなびくわがくろかみにしものおくまでに

〔万葉〕卷二・相聞・八七 磐姫皇后

の「黒髪に霜の置くまで、待ち続ける」と言つたその霜、即ち白髪が生じたことに対する乱れの心を「まよふ」に込めた表現だつただろうと思われる。「霜まよふ」とは実景としては、黒髪に白髪がまじり始めたように、まだら状においた霜の状態とも、又、黒髪が全て白髪になつたように、一面に置いた霜とも解されるのである。

以上の如く、霜の状態については、その状態を読み取ることの出来る歌もある一方、明確に定義することは不可能な例もある。ところで、霜に対する形容は、霜がおりたことを示す「置く」「結ぶ」「なる」「見ゆ」の表現、寒さを示す「さゆ」「さゆる」「さむし」「こほる」、はかなさを示す「解く」「消ゆ」、草木を枯らせる「かる」といった霜の状態ではなく、霜の属性を表す表現が一般的な中で、霜の

深くおりたことを示す「ふかし」六例、「かさなる」一例を見る事が出来る。但し、この例も八代集に限ると、『新古今』の一首のみである。⁽¹⁵⁾ その一方、露については八代集に限ると「ふかし」は一例であるが、「しげし」は十首を数える事が出来る。露には量的な認識はあつても、霜にはなく、霜は置くこと、置いたことの意義が問われるのであつて、その状態については問題とはならなかつたのではないかと思われる。それ故、「霜まよふ」には、従来に欠けていた量的認識を示す表現であつたと考えることも出来るが、やはり、伝統的発想に沿つた、状態を表すことには関わらない表現だつたと思われるのである。「霜まよふ」は初霜であることを示すことが主眼の表現であつたのである。初霜ではあつても、ひどくおきることもあり、薄く置くことも、まだら状に置くこともあり、その状態は一樣ではなかつたと思われる。

三

「霜置きまよふ」「霜まよふ」は、霜の置く場は前提としてある。(10)歌の「霜まよふを田」のように、置く場が示されることによつて、霜景色は了解される。但し、「霜まよふ」が「霜まよふ空」と続く時、現実を超えた幻想的空間

を想起させる。

あしへゆくかものはがひにしもふりてさむきゆふへ
はやまとしおもほゆ

〔万葉〕卷一・雑歌・六四 志貴皇子

たちばなはみさへはなさへそのはさへえにしもふれ
どいやとこはのき

〔万葉〕卷六・雑歌・一〇一四 聖武天皇

たてもなくぬきもさだめずをとめらがおるもみぢば
にしもなふりそね

〔万葉〕卷八・秋雜・一五一六 大津皇子

たびびとのやどりせむのにしもふらばあがこはぐく
めあめのたづむら

〔万葉〕卷一・相聞・一七九五 遣唐使親母

のように、霜降るは『万葉集』の伝統的発想である。⁽¹⁶⁾ 加えて、片山享氏の『堀河百首』以後、『フル』系表現が再び復活してくる(前掲論文)という御論のように、『新古今』にも

秋さればかりのは風に霜ふりてさむきよなよな時雨
さへふる

世の中のはれ行く空にふる霜のうき身ばかりぞおき

どころなき (雑歌下・一七四〇 前大僧正慈円)

の歌が見られ、定家も

道のべのひとごとしげき思草霜のふりはとくちぞは
てぬる

〔拾遺愚草〕怨恋・一七四五

月にふく嵐ばかりやむかへけん南の山の霜のふるみ
ち

〔拾遺愚草〕山家・一四八三

と詠んでいる。慈円歌に「空にふる霜」という用例はあるが、霜置く場としての空はこの一首のみで、新奇な表現と言える。そのため、(6)の定家の「霜まよふ空」は、その新奇さをそのまま受容しての「霜まよふ空」と、「霜まよふ、空にしをれし」として、「まよふ」と「空」との間に、句切れ的な小休止を置き、「霜まよふ」の後には、霜が置くべき地上が想定されるという、二つの文脈のもとに解される表現だと思われる。この例歌について、安東次男氏が「切れるとも切れぬともない初句の冠し様」⁽¹⁷⁾と考察され、川平均氏が「初句後置法は、……初句五文字に置くべき詞を熟慮することに他ならないが、より創作主体の表現行為に即して言うなら、一首中での初句の持つ役割・機能を活性化させることであり」⁽¹⁸⁾と考察された定家の初句の機能の活性化の一つとして、初句「霜まよふ」は第二句へつながりながら句切れをもつ構成の句であったと思われるのである。ここには、初句「霜まよふ」の連体形ではあるが、形

の上では終止形でもあることが、句切れを意識させるものにもなっていると思う。

「霜まよふ」は、又、季節が問題になっている。一般的には、上條彰次氏が「秋歌部の初雁題に現れはじめた時代的発想を踏まえる春歌部帰雁題として」⁽¹⁹⁾と考察されているように、一首に初雁と帰雁という対比を見る立場から、「霜まよふ空にしをれし雁」は初雁の飛来する秋のこととして考えられている。しかし、初雁の飛来する時期に、「霜まよふ」ような霜がはげしく乱れる景とは合わないことから、峯村文人氏、久保田淳氏の、冬の季節のことと考える立場がある。秋部における、霜と雁との詠み合わせの歌は次のような歌がある。

あきの夜をさむみわびつつ鳴く雁の霜をのみきてと
びかへるかな

〔千里集〕秋部「秋雁眞霜帰」 五一

雁がねの雲行くはねにおく霜のさむき夜ごろに時雨
さへふる

〔拾遺愚草〕秋・二二三三七

秋もまたいくよの霜のふりぬらん鳥羽田のおもの雁
の翅に

〔建保名所百首〕雑・鳥羽・一〇三七 俊成卿女

しかし、八代集においては初雁と霜との詠み合わせはな

く、『新古今』の配列においても、

秋下「鹿（十六首）、秋田（四首）、秋夜（二首）、
稻刈（二首）、露（十一首）、蟲（三首）、砧（十一
首）、月（三首）、秋夜（三首）、霧（六首）、雁（十
首）、菊（三首）、蟲（二首）、鶉（三首）、秋（二
首）、霜（三首）、秋深（三首）、紅葉（二十四首）、
九月尽（四首）」⁽²⁰⁾

のように、初雁の歌群と霜の歌群との間には時間的な隔たりが見える。初雁と帰雁との対照は構成的な面白さを見る事が出来るのではあるが、初雁と霜との時間的隔たりは埋めようがないと思われる。

「霜まよふ空」とは、久保田淳氏が「空中に鵲の橋その他の通路を想定して、それも紛れてしまうほど、一面に霜が置いている情景を、イメージとして描いているのではないか⁽²¹⁾」と考察されたように、霜が空に「置きまよふ」詩的空間であって、現実には地上に霜がおりていることを意味するのではない。初雁が飛来する頃は、地上からは見えなくても、空の雁の通い路には初霜が置いているというのである。これは、地上からは、霜の置きそうな霜ぐもりの空と見えるのだと思われる。

しもぐもりすとかあるらむひさかたのよわたるつ

きのみえなくおもへば

『万葉集』卷七・雑歌・詠月・一〇八七（作者未詳）と『万葉集』に一例だけであるが、「しもぐもり⁽²²⁾」という詞がある。地上には霜はなく、空に初霜が置いたかと思え、地上からは霜の気配に満ちた霜ぐもりの空の中、初雁が飛来してきたというのが、「霜まよふ空にしをれし雁」の意味する叙景的内容ではなかったかと思われる。

次に、初句切れとして、「霜まよふ」という景を考えた場合、それは、初雁の飛来してきた時の景ではない。詠作主体の心中の景としてあり、初雁と帰雁との時間をつなぐ景として、意味があるのだと思われる。具体的には、初雁の飛来後の地上の初霜の景であり、帰雁前の遅霜の春の霜景色でもあると思われる。「霜まよふ⁽²³⁾」と句切れを形成し、地上に置く霜の空間と時間を表す一方で、「霜まよふ空にしをれし雁」と続き、初雁の空間と時間を表す構成の歌と考えることで秋か冬かという季節の問題は解決するのではないかと思われる。「霜まよふ」は初霜のおりる晩秋から遅霜のおりる早春の季節と、初雁の飛来する、まだ地上には霜のおりていない晩秋の季節を言い表す表現であったと思われるのである。

四

「霜まよふ」という縮約表現は、初句に置かれ、「霜まよふ空」と着想されることによつて、「霜まよふ」と「霜まよふ空」との二の場を示す。「霜まよふ」は現実空間のようでありながら、作者の心に想起された心象の景となる。

「霜まよふ空」は雁が飛来して来た現実の空の景である。

「霜まよふ」という簡潔な表現は、本質的には「霜おきまよふ」の縮約表現であるにしても、印象的には「霜が迷う」とも「霜に迷う」とも解される。霜が迷うとは、霜の置くことのためらいと、霜が空中を舞うかのごとき幻想的な景を印象づける。霜に迷うとは、霜のために道に迷う雁の姿があり、又、長い旅路の果てに飛来して来た雁が晩秋、初冬の頃に置いた初霜を目のあたりにした時の雁の感慨としても理解出来る。こうした意味の多様化は、定家の意図したものであり、縮約化に伴う初句発想により達成されたものと思われる。

註

(1) 久保田淳氏著『新古今和歌集全評釈』第一卷（講談社

昭和五十一年刊）二四一頁。

(2) 塩井正男氏著『新古今和歌集詳解』（明治書院 大正十四年刊）七一頁、久松潜一氏・山崎敏夫氏・後藤重郎氏校

注『新古今和歌集』（日本古典文学大系・岩波書店 一九五八年刊）五〇頁、石田吉貞著『新古今和歌集全註解』（有精堂 昭和三十五年刊）四七頁。

(3) 尾上八郎氏著『評釋 新古今和歌集』（明治書院 昭和二十七年刊）六一頁、窪田空穂氏著『完本 新古今和歌集

評釈』（東京堂出版 昭和三十九年刊）九五頁、峯村文人氏校注・訳『新古今和歌集』（日本文学全集・小学館 昭和四十九年刊）五五頁、安田章生氏『藤原定家研究』（至文堂 昭和五〇年刊）五二三頁、湯之上早苗氏『鵜飼舟』・

『霜まよふ』（教材解釈）（『文教國文學』第三号、田中裕氏・赤瀬信吾氏校注『新古今和歌集』（新日本古典文学大系・岩波書店 一九九二年刊）三六頁。

(4) 註(1)に同じ。二四一頁。

(5) 片山享氏「定家歌の“霜”のイメージについて」（『甲南国文』第三四号 昭和六十二年）

(6) 堅田早苗氏「定家の霜の歌一首」（『高知女子大國文』一六 昭和五十五年）

(7) 久保田淳氏は「霜置きまよふ」といういい方は「心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花（古今・二七七 躬恒）あたりから出ているらしいという想像も可能である」（『前掲書一四二頁）と考察されている。

(8) 「みな人のしもとなれとや露の身を草の末葉に結置きけ

- (9) 『長秋詠草』冬・霜 一五九
- (9) 久保田淳氏は『訳注 藤原定家全歌集』下(河出書房新社 昭和六十一年刊)一四七頁において、「天福元年(一二三三)十月十一日の出家後の詠。あるいは……定家七十六歳の時の詠」と考察されている。
- (10) 「きみにけさあしたのしものおきていなばこひしき」とにきえやわたらむ(『古今』仮名序 なづらへうた)、「けさはしもおきけむ方もしらざりつ思ひいづるぞきえてかなしき」(『古今』恋三・六四三 大江千里)がある。
- (11) 『和歌大辞典』(明治書院 昭和六十一年刊)では、「題意は、冬の夜寒の具象」と説明されている。
- (12) 註(6)に同じ。
- (13) 註(9)に同じ。上・二六七頁。
- (14) 久保田淳氏は前掲書(註(9)上・四七一頁)において、「黒髪のように長い闇路も明けたであろうか。乱れ置いた霜もとけて消えた朝日によって」と解釈されている。
- (15) 「さえわびてさむる枕にかけみれば霜ふかきよの有明の月」(『新古今』冬・六〇八 皇太后宮大夫俊成女)
- (16) 「霜における降る・置くは同時的並行的に用いられていたというよりも、降るは置くよりも先行していた……作歌年代や作者の判明する歌のうち、第三期(天平五年)までを占めるものは降るであつて」(戸谷高明氏「万葉の景物―霜―」『早稲田大学教育学部学術研究』一五 昭和四十一年)参照。
- (17) 安東次男著『藤原定家』(日本詩人選II 筑摩書房 昭和五十二年刊)一五七頁。
- (18) 川平均氏「和歌の初句五文字をのちに置くこと——一詠作技法の諸相と俊成・定家の表現意識——」(伊地知鐵氏編『中世文学 資料と論考』笠間書院 昭和五十三年刊)
- (19) 上條彰次氏・片山亨氏・佐藤恒雄氏著『新古今和歌集入門』(有斐閣 一九七八年刊)五六頁。
- (20) 有吉保氏著『新古今和歌集の研究』(三省堂 昭和四十三年刊)
- (21) 註(1)に同じ。
- (22) 澤瀉久孝氏は「しもぐもり」について、「略解に『夜霜くだらむとて、霧の如く陰るを霜ぐもりといふ』とある。古典大系本に『氣象上、そのようなことはないが、當時の人々はそう考えたらしい』とある。この語ここに一例あるのみ。霜ぐもりをすといふのであろうか」(『萬葉集注釋』巻七 中央公論社 昭和三十五年刊)と評されている。
- (23) 安東次男氏は前掲書において、「また、玄冬の候ではなく、霜気のきびしさもやや峠を越した、忘れ霜に近い候のことのようにも受取れる。そういうためらしいの意が『まよふ』にはあるのだろう。……『霜まよふ』を春季に奪う工夫と見ればこれは大胆な新季語の創出と考えてもよく(二五七頁)と考察されている。

〔付記〕

テキストとして、和歌は『新編 国歌大観』但し、『拾遺愚草 員外之外』は、久保田淳氏著『訳注 藤原定家全歌集』を用いた。『古來風体抄』は、橋本不美男氏・有吉保氏・藤平春男氏校注・訳『歌論集』（日本古典文学全集）、『新古今和歌集抄出聞書』『かな傍注本新古今和歌集』は、新古今集古注集成の会編『新古今集古注集成』に依った。

尚、本論文は平成九年度中世文学会秋季大会において口頭発表したものをまとめたものである。席上、御教示賜りました、有吉保先生、杉本圭三郎先生に厚く御礼申し上げます。